未明文学と社会批判

――「赤い蠟燭と人魚」を中心に――

伊原　洋次郎

〔抄　録〕

小川未明の「赤い蠟燭と人魚」（一九二一）は一九五三年、早大童話会が行った「児童文学宣言」を境に、批判的な評価をされる様になる。母人魚の責任、及び結末について批判がされてきたが、今はその批判を再考し、新しい読みを模索する流れになっており、木村小夜氏や、星野絢子氏によって合法的な読みの可能性が検証された。

戦前から、未明は社会批判的な作風であることが相馬御風によって指摘されていたものの、「赤い蠟燭と人魚」における社会批判的側面からの読みはまだ十分でない。

本稿では『赤い蠟燭と人魚』における娘人魚の描かれ方と「月」などの言葉から象徴的な読みの可能性を模索し、未明が表した主張を考察する。

キーワード　小川未明、赤い蠟燭と人魚、象徴主義

一、「赤いろうそくと人魚」における先行研究

小川未明は新潟県中頚城群高城村大字五分（現　上越市幸町九九番地）に生まれた。北国の厳しく単調な自然の中で育ち、父の影響もあって波乱万丈な少年時代を過ごした。中頚城郡第一小学区の岡島小学校に入学し、そのころから高田師範学校書記をしていた秋山長明の下で漢文の素養を身に付けた。一三歳の時、高田中学に入学し、そこで出会った漢学者、江坂香堂、北沢乾堂、歌人の下村千別等の影響で詩文に興味を持つようになる。一五歳になってから〈切偲会〉を結成して、同人雑誌『江碧山青』を編集する。

一九歳の時に高田中学を中退し、東京専門学校（現　早稲田大学）の英米哲学科に入学する。翌年、一高生の藤村操の投身自殺に際して執筆した感想が機縁となって坪内逍遙と親近する。二二歳で処女作「漂浪児」を出したとき、逍遙から「未明」の雅号をもらい、「小川未

明」という名前が使われ始める。

明治三八年、二三歳の時、早稲田大学を卒業後し、翌年に日本女子大卒の山田キチと結婚。このころから早稲田文学社に入り、児童文学誌「少年文庫」を編集する。第一号で打ち切りとなるものの、これが児童文学との最初の機縁となる。

三二歳の時、長男哲文が病気のため幼くして命を落とす。このころから未明は児童文学を多く執筆するようになる。三六歳の時、長女晴世が病気のため命を落とす。そして、悲二人目の子供が亡くなった三年後に『赤い蠟燭と人魚』を描く。

作品『赤い蠟燭と人魚』は一九五三年の早大童話会が中心となった「少年文学宣言」を境に批判的な評価に変わる。古田足日、鳥越信、いぬいとみこが未明文学の批判の中心であった。批判点は大きく①町が滅ぶという結末の解釈について、②娘人魚の寂しさという問題について、③神様との関連について、この三つである。

町が滅ぶことに言及した木村小夜氏は

おそらくは何の取り柄もなかったであろう片田舎の「小さな町」にある種の個性と反映をもたらしたのは、「絵を描いた蠟燭」の大量生産・販売であり、これにより経済的恩恵を被ったのは、老夫婦だけでなく町全体だったはずだ。このことは、先行研究で「不条理」とされていた町全体が滅びる結末を必然的なものにしていく。(1)

と社会構造や経済に言及した読みの可能性を示した。

「赤いろうそくと人魚」を描く以前から小川未明は社会の在り方についての憤りや、主張を過激に描く作風が未明の幼馴染でもある相馬魚風によって言及されている。

文明に対する絶望的な気分を表白するに努めたこの第二期は、現代の芸術家としての未明君の為めに、最も意味深い期間ではなかったかと思う。(2)

「赤いろうそくと人魚」にも未明が持っている社会に対する憤りが象徴的に表れていると考えられる。ここに経済的な読みをして町が滅ぶことに合理的な意味づけを与えるのであれば、弱者を蔑ろにする社会は自然に滅ぶであろうということを未明は表現していると思われる。

「捨て子」をする母人魚とさみしさという問題を持った娘人魚について、大久保みどり氏は以下の様に述べる。

〝窮鳥懐に入る〟母親にとっては、最後に残された望みの場、生きる権利、生きている事の強調のために、何としても飛びこまねば、もはやどうにも「たまらない」懐であった。そこしか道はないのである。「聞いている」「思った」ということばの繰り返しによって、母親が、自分の行動と思想に漸次、確信と正当性を与えようとしているのが伺える。(3)

と母人魚の愛情の存在を指摘し、アンデルセン「人魚姫」との比較によって、「ユートピア」を求める未明の真理と、現状の世界からの脱却を求めた母人魚が重なり合っていると述べ、

「北の海」から脱出するために、「捨て子」をした動機の背後には、「個」と「社会」の独自性・尊厳性・自由性・統一性を願い、そのユートピア建設のために、愛を基盤にして乗り出して行こうと

する未明の思想があった。[4]

と結んだ。北の国から脱出することは北国の人が思い描いてきた思想であろう。相馬御風は以下の様に述べる。

未明君の芸術は此の北国人の苦しい訴えを、代表的に表白した点に、何よりも鮮やかな特色が認められる。[5]

北国の心境を表現する事に長けていた未明の北国人の憧れとして南の暖かな国に思いを寄せる考え方は母人魚の人間世界にあこがれる考え方に一致する。

「神さま」については星野絢子氏が言及している。氏は人間と人魚、神さまの区別の違いに着目し、老夫婦と娘人魚の優劣を図式的に解説することで結末の解釈に繋げ、以下の様に結んだ。

現世的な利益とはかけ離れた母人魚の根源的な思いが、神に現世利益を求め続けた「人間の世界」を飛び越えて、「神さまの世界」を求めたのが、このラストシーンではないか。[6]

神様に対する現世利益的な役割から、超越的な神に立ち返ることが表されていると言っている。

町が滅ぶという結末も母人魚についても、神さまについても、社会風刺や象徴的な主張が込められている可能性があることがわかる。相馬御風も未明作品の特徴について

ただ抑えようとして抑える事の出来ぬ内部生命の苦しい叫び、切なる訴えを洩らすことが、芸術家としての未明君のこの上ない望みであったのだ。[7]

と未明文学の特徴を述べている。未明の作品にはこの「内部生命の苦しい叫び」を表白する主張が少なからず込められていると感じられる。当然、その中には今回扱う「赤いろうそくと人魚」も含まれる。

次からは、これら三つの主な問題と北国と南国の関係の、合わせて四の観点を考えていき、そこにそれぞれ未明の思想的な特徴が込められているという事を明らかにしていきたい。

二、娘人魚の顚末と責任の所在

お婆さんはある夜に神社にお参りに行った帰り、石段の下に人魚の捨て子を拾う。その時に次のように思った。

おまいりの帰りに私の目に止まるのは何かの縁だろう。このまま見捨てていっては神様の罰が当たる。きっと神様が私たち夫婦に子供のないのを知って、お授けになったのだから帰っておじいさんと相談をして育てましょう。[8]

おばあさんは家に子供を連れ帰るとお爺さんと相談して育てる決意をする。その時にお爺さんのは次のように言った。

それは、まさしく神さまのお授け子だから、大切にして育てなければ罰が当たる。[9]

ここまでは母人魚が願った通りの展開と言える。直後に娘が人間でなく人魚であることがわかった時にも、おばあさんが以下の様に言った。

いいとも何んでも構わない、神さまのお授けになった子供だから大切にして育てよう。[10]

この箇所は表面的にとても暖かく見える。老夫婦が信心深く、いつも感謝の心を持っていて、親切だという印象が感じられる。

娘は大きくなると自分と周りとの違いに恥ずかしさを覚えて人前には出ない。しかし、蠟燭を買いに来る客は娘を一目見ようと娘人魚に興味を持つ。

けれど一目その娘を見た人は、みんなびっくりするような美しい器量でありましたから、中にはどうかしてその娘を見ようと思って、蠟燭を買いに来た者もありました。[11]

この時点では、娘人魚に対して人々の注目が集まっていた。寂しいところは唯一「人間と違う」という事に恥ずかしさを持っていたという所であろう。娘人魚がこの後、蠟燭に赤い絵の具で絵を描いたあたりから娘の運命は転落し始める。

誰でも、その絵を見ると、蠟燭がほしくなるように、その絵には不思議な力と美しさが籠っていたのであります。

「うまい筈だ、人間ではない人魚が描いたんだもの[12]」

絵を描いた蠟燭は飛ぶように売れ、お宮に上げた蠟燭の切れ端を持っていると船が遭難しなくなるという不思議な話が湧いて出てくる。この時に娘人魚は以下の様に思う。

「こんな人間並みでない自分をも、よく育て可愛がって下すったご恩をわせれてはならない。」と、娘は、老夫婦のやさしい心に感じて……[13]

この時に娘人魚ははっきりと、老夫婦の行いを「やさしい心」と感じていた。娘の感謝の気持ちがはっきりと顕れている。

蠟燭の不思議な力は遠くの村まで響くと同時に、「神様」に対しての信仰が集まり、娘に対する注目は「神様」にすり替わる。

神さまの評判は良くなりましたけれど、誰も、蠟燭に一心を籠めて絵を描いている娘のことを思うものはなかったのです。[14]従ってその娘を可哀そうに思った人はなかったのであります。

ここで初めて、語り手は娘を「可哀そう」と説明し、人々の意識が娘から神様へ置き換えられ、娘は村人から忘れられた存在となってゆく。

娘は、疲れて、折々は月のいい晩に、窓から顔を出して、遠い、北の青い青い海を恋しがって涙ぐんで眺めていることもありました。[15]

ある時、南の国から香具師が来て、「人魚は、不吉なもの」と老夫婦に説明すると、老夫婦は欲にかられて娘を売ってしまう。この時、老夫婦は「鬼のような心持」になり、娘はひたすら蠟燭に絵を描いていた。その時の娘の心境はまさに「身の行く末を思うて悲しん」でいる不安や寂しさといった暗い感情の実現であった。

「悲しい思い出の記念」に「赤く蠟燭を塗りつぶして」しまい、香具師に売られていく。娘人魚が登場するのはここまでである。

このような娘人魚の顛末で、上笙一郎は自身の生い立ちと重ねて、母親の人魚から捨てられ、第二の父母ともいうべき蠟燭屋の老夫婦からも見放された人魚の少女が、他人とは思えなかった。わたしは、あわれな人魚の少女に、ひとりぼっちの自分の姿を確かに見たのだ。[16]

ここで解ることは、娘人魚が孤独であったという事に対して、物語の登場人物すべてが関わりを持って、責任の一端を担っているという認識で読まれていた事であろう。物語の中で、人々の意識が娘人魚から神様に移り変わり、完全な独りぼっちを作り出している。

村人は町が滅びた時に犠牲になったと考えられているが、それが直接関係しないと考えられるのは、それが村人の視点から読みだからである。社会批判的な作者未明の立場では、村人が弱者である娘人魚に対して目を向けなかったことが大きな問題となってくる。

母人魚の責任に関して大久保みどり氏は、この様な従来の考え方に対して母人魚の「愛」を考察し、「母人魚に確信と正当性を与えようとしている」と述べている。

滑川道夫氏は結末の「濡れた女」とお宮に蠟燭を上げた女、町を滅ぼした張本人を母人魚と断定して結末を説明する。

人魚の母親の超人的な力によってみんな滅ぼしちゃう。人魚の母親の激しい怒りは、作者の正義感の噴出的表現でしょう。仇討ち思想というよりむしろ東洋的な「天罰」思想でしょう。そして、肝心の人魚はいったいどうなったのかということには全くふれていない。そういうふうに嵐を巻き起こして暴風で船を沈めてしまうような力を持っている人魚の母親だから、海の底へ沈んだ織のなかから、自分の娘を助けるぐらいは簡単にできたのかもしれませんが、その人魚の娘の運命については語られていないからいっそうに頼りないものが、やりどころのないような怒りが感じられます。[17]

母人魚が町を滅ぼしたと言い、それは未明の正義感の噴出的な表現であるという。娘人魚の結末については語られない。だからこそやりどころがないと述べている。

上氏、滑川氏のいうように娘人魚の不幸の一端には母人魚がいたと思われる。育った娘人魚は自分の姿を恥じて、人間と違う存在であることを常に意識していた。このときすでに母人魚が描いた人間と同じように暮らすという願望は破綻していたことになる。母人魚は自分たちが人と同じように暮らせると思い、娘人魚は人間世界にいて自分の姿に違和感を覚え、劣等感を抱く。このことは明らかに母の願いと食い違っている箇所である。ゆえにここから娘人魚はどんどん「可哀そう」な境遇に見舞われる。

物語の構造そのものが娘人魚を孤独にすると考えられる。母人魚の「人間は、魚よりも、また獣物よりも、人情があってやさしいと聞いている。」という思い込みに近い感情は、それが結末で裏切られることを想起させる。また、「けっしていじめたり、苦しめたりすることはないと聞いている」、「一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、きっと、無慈悲に捨てることもあるまいと思われる」という箇所は、娘人魚が不幸になる事を暗示している。老夫婦が「神様のおかげだから」「神様の罰が当たる」というセリフを多用して、娘人魚を育てる動機を「神様」に求めることで、娘人魚と老夫婦の繋がりは神様が無くては成り立たないものとなってしまった。

星野絢子氏はこのことについて娘人魚と老夫婦の優劣に関して「神様」が重要な位置を占めていると言い、以下の様に言及した

〈かわいそう〉な愛らしい劣位の存在としてではなく、〈神さまのお授け子〉だから育てる、というように「神さま」の存在による感情の塗りつぶしが起きていることも見逃せない。[18]

「神さまのお授け子」というセリフは、おばあさんが捨て子（娘人魚）を拾う場面で、おばあさんの印象として既にあり、おじいさんと相談したときに改めて確認しているのは、まるで自己暗示をかけようとしている呪文のように感じられる。

したがって神さまも、娘人魚を不幸にする存在なのである。神さまの存在は娘人魚が老夫婦に育てられるためにはなくてはならないものであった。そして、神さまとの関係を否定されることで、娘人魚が老夫婦から見捨てられるという構図が完成する。

娘人魚を不幸にしたのは、老夫婦、母人魚、村人、神さまのすべての登場人物である。老夫婦は「赤いろうそくは、不吉」という事になり蠟燭屋をやめる。村人は最後に町が滅んでしまうという結末を与えられる。神さまは人々からの信仰を失い町の鬼門となる。そして母人魚は娘の幸せという願いがかなえられなかった。このように考えると登場人物すべてが娘人魚を不幸にした罰を受けていると考えられる。

また、最後の「いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いてゆくのを見たものがあります」という箇所では、お宮に蠟燭を上げていたのは母人魚と考えられてきたが、それ以外の可能性を考える事で、読みが広がるのではないだろうか。

たとえば、これを自然現象的な表現ととらえることは出来ないだろうか。

娘人魚が蠟燭屋にいた時には、お宮に上がったろうそくの灯は絶えることが無かった。その頃の光景は人々がおぼえているだろう。しかし、結末で上がった蠟燭の灯が以前のものと違っている。

物語の中でその個所は以下の様に表現される。

真っ暗な、星も見えない、雨の降る晩に、波の上から、赤いろうそくの灯が、漂って、だんだん高く登って、いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いてゆくのを見たものがあります。幾年もたたずして、そのふもとの町はほろびて、滅くなってしまいました。[19]

この箇所の捉え方は二通りある。つまり、蠟燭が「赤い」のか、灯が「赤い」のかである。これによって読みが違ってくるだろう。

蠟燭が「赤い」場合では、母人魚と思われる最終章で蠟燭を買いに来る「女」であることを想像してしまう。「赤いろうそく」を買っていったのが「女」だったからである。それならば母人魚が蠟燭を上げたと読み、結末は母人魚が神の力を借りて起こしたと解釈することができる。

灯が「赤い」場合は違ってくる。これはあくまで、遠目から灯が見え、以前との比較で「赤い」という感想を持つという事。ここには過去の回想が想起される。

前者で捉えるのであれば、いったいこの「赤いろうそくの灯」を見た者は、どこで「女」が蠟燭屋の赤い蠟燭を買ったという情報を得たのか、遠目で見ているはずなのに、蠟燭の色が「赤い」と分かるのか。前者は現実的に考えられない。

「赤い」灯が昇った時、あたりは「真っ暗」である。真っ暗な時に海から上がる光は「月」を想起させないだろうか。物語では「月」が見えないとは言っていない。こう考えた時、「赤い」色は象徴的な何かをあらわしていると考えられ、後述する母人魚の象徴として成り立つと同時に、「月」以外の何かを想起し、また新たな読みの可能性が出て来る。

娘人魚の不幸に対する責任は今まで見てきたように、娘以外のすべての登場人物によって、ひいては社会によって齎されたものだった。このことは結末で町という社会構造が崩壊するのに十分な理由となっていく。

また、お宮に蠟燭が上がるという記述のある箇所の直前に以下のような説明がある。

月が、雲間からもれて波の面を照らしたときは、まことに気味悪うございました。[20]

なぜ、月が雲間から海を照らすと気味悪くなるのか。ここには物語を読み解くうえで重要なキーワードになっているのではないか。次章では物語に登場する月の表現方法について考えていく。

三、物語に於ける月の表現

以下は「赤いろうそくと人魚」冒頭の情景描写である。

北方の海の色は、青うございました。あるとき、岩の上に、女の人魚が上がって、あたりの景色をながめながら休んでいました。雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限りない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。[21]

母人魚が登場する際にも雲間からもれた月が描写されている。この景色を見ることで母人魚は「冷たい、暗い、気の滅入りそうな」北の海での生活を思い起こしたのである。つまり、娘人魚を陸に産み落として、海の中の世界から解放してやりたいという母人魚の願いの起点は、この描写にあったのである。この情景が人魚の母に子供を陸に産み落とす決意をさせ、大久保みどり氏がいう「そこしか道はない」[22]理由となる。また、結末の表現、「月が雲間からもれて」と冒頭と同じ描写になっていることも無関係ではあるまい。

母人魚の出現に関しても「月」の描写が大きくかかわっている。母人魚の説明で次のような個所がある。

月の明るく照らす晩に、海の面に浮かんで、岩の上に休んで、いろいろな空想にふけるのが常でありました。[22]

月の明るく照らす晩には母人魚が海の面に現れる。その時に、お宮に上がった蠟燭を確認する。だからこそ第二章で語り手が「毎晩のように、そのお宮に上がったろうそくの灯影が、ちらちらと揺らめいているのが、遠い海の上から望まれたのであります」[23]と説明している。海の上から蠟燭が確認される必要性は最後の「赤いろうそくの灯」を「見たものがあります」に繋げるだけでなく、月の出ている晩に母人魚が確認するための条件になっているのである。

娘人魚は成長して、蠟燭に絵を描きはじめ、蠟燭が飛ぶように売れるようになり、娘人魚は「月のいい夜に、窓から頭を出して、遠い、

北の青い、青い、海を恋しがって、涙ぐんで眺めている」のである。「月」の出る晩は母人魚が「海の面」に現れる時である。

また、娘人魚が香具師に売られていくとき「波の音を聞いていると、なんとなく、遠くの方で、自分を呼んでいるものがあるような気が」する。これは「月の明るい晩」のことであった。この時も母人魚が海面に現れていると捉えることが可能である。

さらに、蠟燭を買いに来る「女」が現れた時、「黒い髪の毛がびっしょりと水にぬれて、月の光に輝いていた」と「月」はここにも表れる。この女が母人魚に結びつくために必要な描写が「月」である。物語の中では、あくまで謎の「女」にしようと描かれていて、ここに物語の不気味さがある。

ここまで考えてみると、語り手が説明する「月が、雲間からもれて波の面を照らしたときは、まことに気味悪うございました[24]」という理由が説明できるのではないだろうか。

つまり、母人魚は物語の後半で不思議なことが起こった時に現れ、そのときには「月」がでていた。「月」は物語を通して、母人魚を象徴していることがわかる。だからこそ、雲間からもれた「月」が気味悪いものであると町の人々に感じられたのである。

四、北と南に現れる思想

相馬御風が未明の作風に言及した「小川未明論」には以下の様に示される。

一つは即ち北国の暗い天地に生まれた人々がいつとなく南の明るい国を夢見て、灰色の故郷を逃れ出て、遠い旅路に上るような、何か知ら遠い遠い夢の世界にあこがれる事によって、辛うじて此の単調なさびしい生の歩みをつづけて居る。[25]

これは先に挙げた、相馬御風が未明について分析した特徴のうちの未明の最も早い段階である。この頃から小川未明作品は北国の人々が南の暖かな国に憧れを抱きながら単調な厳しい自然の中で生活するようすが見事に表現されていることは認知されていた。未明自身も、北国と南国についての感想を一九二二年に感想集『生活の火』にて発表している。そこに掲載されている「北と南に憧れる心」には、ロシア文学を称賛して、以下の様に感想を抱いている。

理想主義者の心持を面白く思うと同時に、またお伽噺の中にあるような黒海沿岸を慕う心持に於て、いつもたまらない人間性の面白味を独り露西亜文学に感ずる。[26]

未明はロシア文学を北国人の自分の立場と重ねて述べている文であるという事は言うまでもない。また、露西亜文学の南国「黒海沿岸」と「理想」に「憧れる心」は相馬御風が示した未明文学の特徴である南国に憧れる北国人と一致している。

ところが、物語の中で「南の国」は人魚を買いに来た香具師がいる場所であり、娘人魚にとって「幾百里も遠い、知らない、熱い南の国」で決して憧れている世界ではない。むしろ、娘人魚にとっては恐れている未知の世界であった。

このころ社会風刺をよく描いた未明が「南の国」に代わってあこがれを抱いたのは未明の「理想」の社会の在り方ではないだろうか。未

明は感想集『芸術の暗示と恐怖』にて以下の様に述べる。

顧みて、私達は、年少の時代から、今日に至るまで、どんな考えを抱いて道を歩いて来たか。そのいずれの時代にあっても、曾て希望をば捨てなかった。

『きっと、いまにいゝ世界が、自分達の眼前に開かれる。』

そう思って来たのだ。そして、いま、ようやく、その考を捨てなければならなくなった。虚偽と譎詐けっさと不正に満ちた社会には、もう光明がない。希望を繋ぐことができない。そう考えんとするのだ。

この美しい自然も自由な大空も決して美しくもなければ、また、自由でもないと思うに至ったのである。

中略

芸術は、現実の凝視から産れる。現実を忘れて、そこに、吾人に価値ある芸術は存在しない。

私達は、この現実に於て、暴力が憚はばからずに行われていることを知っている。強者は、徒らに弱者を虐げている事実を見あきる程見ている。人間が、人間を奴隷とし、自欲のためには、他の苦艱くかんをも意としない、そのことが人道にもとるにもかゝわらず。不問にされることも知っている。そして、この社会は、民衆が喜んだり、楽しんだりすることよりは、一層、苦しんだり、悲しんだりしているところであることもよく感じている。

これが疑いなく現実である。それにもかゝわらず、多くの芸術家は、敢てこの現実に触れようともしない。

私のこゝにいう触れるということは、直ちに、その真相を究めようとする誠意のある輩が少いということである。

最も、正直で良心あるものが、芸術家でなければならぬ筈だ。[27]

「いい世界」が開かれると年少の時代から思い、それを芸術に表すという未明の在り方は「赤いろうそくと人魚」にも正直に表れる。

人間は、この世界の中で、いちばんやさしいものだと聞いている。そして、かわいそうなものや、頼りないものは、けっしていじめたり、苦しめたりすることはないと聞いている。いったん手なずけたなら、けっして、それを捨てないとも言っている。[28]

「かわいそうなもの」「頼りないもの」に優しい世界、それは未明が求めた社会主義の精神そのものである様に思われる。母人魚は理想の世界を求め「冷たい、暗い、気の滅入りそうな」海から脱却することを求めて、子供を陸に産んだのである。

大久保みどり氏はこの理想の社会をユートピアと称して以下の様に述べる。

未明にとっては、何宗でも、何主義でもよかったのである。現実に立脚していて、それが真実でさえあれば、それ故、表現において一貫性がなく、混沌さを感じさせたり、「認識者」的側面を見せたりするが、是非は別としても、それらは彼独自の分析と総合によってうちたてられた結果なのである。未明は、この理想に立脚している限り、やがてユートピアに行きつけるという確証もその存在性も不明瞭にしか持つことは出来ないし、又めざすべきユートピアの世界は現実の世界と大差を置くことは出来ない筈であ

る。[29]

「彼独自の分析と総合」によって打ち立てられた理想であるため、「不明瞭」であり、結果、母人魚の求めた世界は結局「北の海」と変わらないものだったというのが氏の考えである。

たしかに、この考えはあくまで母人魚の個人的な理想である。確証も存在性も「不明瞭」で、この箇所は現実的にありえない事は未明自身も認識していたはずである。だからこそ物語でこの理想は人間によって打ち砕かれる。母人魚の夢見た理想の世界は存在しえないということが表現されている。人間社会にそうした「やさしさ」がなければ滅んでしまうという危惧が「町が滅びてしま」うことに象徴れていると読むことも可能である。娘人魚は老夫婦を「やさしい」と感じていたが、その正体は前述したように神様にもたらされた、滅びへの布石である。老夫婦は「神さまの罰」を恐れて人魚を育てた。そこにはもはや母人魚の理想とする「やさしさ」は存在しない。「神」という理性の皮膜が無くなれば、老夫婦は「金に目がくらむ」欲望の塊と化した。このような社会の姿は、未明が今までに現実世界で感じてきた社会の姿であり、社会主義活動への原動力であった。

母人魚の求めた理想の世界は「やさしい」人間社会である。娘人魚が売られていく時に、南の国は以下の様に表現される。

内気な、やさしい娘は、この家から離れて、幾百里も遠い、知らない、熱い南の国へ行くことを恐れました。[30]

南の国はマイナスのイメージで表現される。

未明作品の特徴の一つに、北国人が南の国に憧れながら単調な生活をするというものがあったが、ここで現れているのは母人魚が理想の人間社会を追い求めたという事であり、憧れを抱いた登場人物を描くという未明の特徴によく似ている。

北国人が南国へ憧れを抱く未明文学の特徴は、このように母人魚が理想の世界へあこがれる形に変化していき、その思想が「赤いろうそくと人魚」にも表れるのである。

このことから物語において南が「幾百里も遠い、知らない、熱い」というマイナスイメージで表現されるものの、暖かな人間世界を憧れる母人魚は未明文学の特徴として相馬御風が述べた憧れという特徴をよく表している。

繰り返すが、町の人々、老夫婦、神様、母人魚のすべてが娘人魚の不幸に関わり、それによって自分にも不幸が現れる。老夫婦には蠟燭の悪い噂と「蠟燭屋をやめ」てしまうという不幸がおこる。神様には人々の信仰が無くなり、「町の鬼門」となる。母人魚は「子供がどこにいても、しあわせに暮らしてくれたなら、私の喜びは、それにましたことはない」まで言わせた願いが叶わず、娘人魚が不幸になっていしまう。

そして、町の人々には滅びが訪れるのである。社会が滅びるという事は未明の危惧が象徴的に現れており、ここだけを見るといぬいとみこ氏の言うような理不尽な滅びになる。しかし、娘人魚の不幸に十分に関わり、蠟燭の恩恵に預かっているのであるから滅びが訪れるのに十分な理由となる。弱者に対する社会のあり方を批判しつづけた未明らしい結果と言える。

さらに、これは相馬御風の分析「文明に対する絶望的な気分を表白するに努めた此の所謂第二期は、現代の芸術家としての未明君の為めに、最も意味深い期間ではなかつたかと思ふ」にも合致する。

結び

小川未明は新ロマン派と評されてはいるものの、その性質は特殊で彼独特の作風を認められていた。彼の文学に関する原動力は、初め北国人の南国に憧れながら単調な生活をする様子を描くものが多かったが、早稲田大学にいた頃から社会風刺的な主張を文学に込めるようになった。その後、二人の子供を相次いで病気で亡くしてから、さらに社会主義的な風潮は強まり、同時に児童文学の執筆が多くなっていった。

「赤いろうそくと人魚」はその構造がすべて娘人魚の不幸に集約され、娘人魚は果てしもない孤独に追い込まれていく。先行研究では星野絢子氏が老夫婦の娘人魚に対する変心に関して「罰が当たる」という科白が繰り返し使われている点に着目して、神様の存在が娘人魚を育てる動機であるとした。母人魚については大久保みどり氏が「愛」というキーワードをもとに陸に産み落とした母人魚の動機を述べた。木村小夜氏は町の滅亡について経済的な観点から必然性を見出した。

これらを総合的に見てみると母人魚、老夫婦、村人、神様の娘人魚以外のすべての登場人物が弱者である娘人魚の不幸を作り出していたことに加え、皆がその報いと言うべき不幸に見舞われる。この構造の中に未明の表現方法である象徴的な描かれ方を「月」を取り上げて、それが母人魚の出現を象徴していることを示した。

さらに、未明文学に関するこれまでの評価を参考に、「赤いろうそくと人魚」に込められた未明の思想を感想集を中心にして分析した。そうすることで、一層町の滅亡が現実味を持って現れてくることが解った。

この物語は、すべての登場人物と事象が、娘人魚の不幸に関わっており、娘人魚の不幸が物語の原動力となっている。物語を未明の作風や考え方に基づいて読んでみると、未明の社会に対する危惧、弱い者に優しくない社会の在り方に対する憤りが象徴的に描かれていることが解った。

〔注〕

(1) 木村小夜「小川未明『赤い蠟燭と人魚』とその周辺」(『福井県立大学論集』福井県立大学、2007, 7, 259頁)
(2) 相馬御風「小川未明論」(『早稲田文学』1912, 1)
(3) 大久保みどり「小川未明『赤い蠟燭と人魚』研究-捨て子の動機を中心に」(『論集』、1979, 3, 4頁)
(4) 右に同じ
(5) (2)に同じ
(6) 星野絢子「小川未明『赤い蠟燭と人魚』論：母人魚の恨みという枠組みを超えて」(『国文白百合』白百合女子大学国語国分学会、2011, 3, 68頁)
(7) (2)に同じ
(8) 小川未明『小川未明童話集』新潮文庫、1951, 11,
(9) 右に同じ
(10) 右に同じ
(11) 右に同じ

(12) 右に同じ
(13) 右に同じ
(14) 右に同じ
(15) 右に同じ
(16) 上笙一郎『未明童話の本質-赤い蠟燭と人魚の研究』勁草書院、1966, 1頁
(17) 滑川道夫『児童文学の軌跡』1988, 9
(18) (6)に同じ
(19) (8)に同じ
(20) (8)に同じ
(21) (8)に同じ
(22) (3)に同じ
(23) (8)に同じ
(24) (8)に同じ
(25) (2)に同じ
(26) 小川未明「北と南に憧れる心」(『生活の火』精華書院、1922, 7)
(27) 小川未明「人間否定か社会肯定か」(『芸術の暗示と恐怖』早稲田文学パンフレット：12, 1924, 79頁)
(28) (8)に同じ
(29) (3)に同じ
(30) (8)に同じ

（いはら　ようじろう　文学研究科国文学専攻修士課程）
（指導教員：有田　和臣　教授）
二〇一四年九月三十日受理